

寺田寅彦が推薦文を寄せた全集内容見本

四宮義正

寺田寅彦全集第 16 卷には書評、推薦文、序文、投書、談話などの小文が収載されているが、子規全集とゲーテ全集のために書かれた推薦文もある。その文が掲載されている内容見本は図書館には納まっておらず、目にすることは少ないと思われるので紹介する。

1. 子規全集

第 16 卷での表題は『子規全集』であるが、不思議なタイトルであるし、紛らわしい気がする。「後記」をみると、『子規全集』全 22 卷は改造社において昭和 4 年 6 月より刊行。その推薦文と思われるが、初出未見。」とある。ここでいう初出とは子規全集内容見本のことだと思われるので、調べてみたところ 2 種類あった。次に表紙と寅彦の推薦文を示す。



改造社子規全集内容見本

同パンフレット

寺田寅彦の推薦文

①子規全集予約募集（冊子体、上の写真左）全 18 卷。

表紙を含めて全 12 頁の冊子。全巻の構成・説明が主であるが、表紙裏に斎藤茂吉、佐藤春夫、寺田寅彦など 7 名の短い推薦文がある。

②子規全集予約募集（パンフレット、上の写真中央）全 18 卷。

表紙を含め 4 頁（1 枚を二つ折り）。表紙裏に寺田寅彦など 3 名の推薦文がある。寅彦の推薦文は上の写真右。「子規の先覺的な頭」という題で筆名が寺田寅彦であることが分かる。本文は全集と同じである。（①も同じ題と本文である。）

いずれも 18 卷となっているが、最終的に 22 卷になったのだろう。しかし話はこれでは終わらない。インターネットの記事〔古本夜話 431 柴田宵曲とふたつの『子規全集』〕によると、この改造社版には元版があって、アルス社版がそれだという。引用してみる。

それらの事情はともかく、昭和 4 年から柴田は再び『子規全集』の編集に携わっている。それは昭和 4 年から刊行され始めた改造社版全 22 巻で、こちらは定価 1 円とあり、それは文字通り円本として出されたことを意味している。内容を比較してみると、4 巻に及ぶ増補があるにしても、アルス判の四六縮刷版で、表裏見返しに掲載された子規の絵まで同じである。これは明らかにアルスが改造社に『子規全集』の紙型と版板をゆずったことにより、出版されたのであろう。

この記事は、子規全集の編集に関して、表には出ていないが柴田宵曲の尽力が非常に大きかったことを主題にしているのでこの引用だけではやや分かりにくい、要するに改造社版の前にアルス社版があったということである。

そこで、アルス社版の内容見本を調べてみた。こちらも 2 種類ある。

①大正 13 年 6 月より刊行開始の全 12 巻。(右の写真左)

12 巻の写真、発行趣旨、賛助員氏名、12 巻の構成、組み見本などで推薦文は無い。

②大正 15 年 7 月より刊行開始の全 15 巻。(右の写真右)

前の 12 巻用内容見本を

基に、全 15 巻の写真、会員氏名（大正 13 年版の購入者氏名）が大幅に増えて、推薦文が多量に入っている。会員では石原純、中村不折、芥川龍之介、北原白秋、高嶺俊夫、野上豊一郎、安倍能成、真鍋嘉一郎などの名前が見える。

推薦文執筆者は多くて、芥川龍之介、寺田寅彦、斎藤茂吉、野上豊一郎、野上弥生子など 38 名である。ここに寅彦の推薦文が出ている

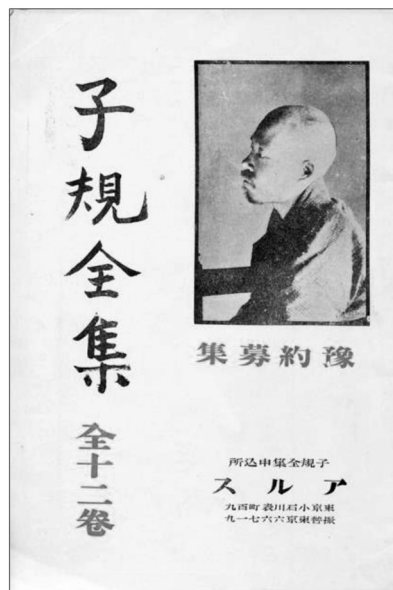
全集とは少し異なる文章であるので、全文を転記する。ただし漢字、仮名遣いを修正したところがある。

子規の先覚的な顔 理学博士 寺田寅彦

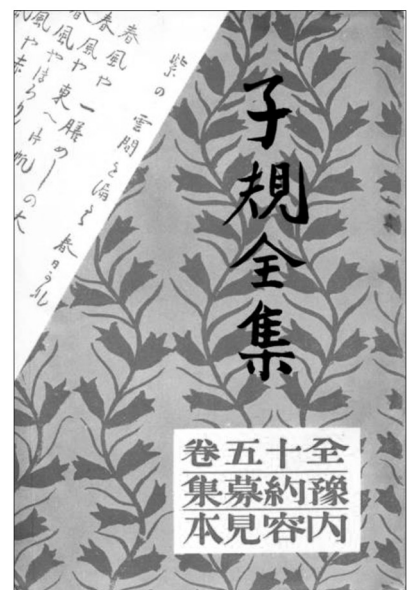
子規と言えば、あの情熱的な眼と、あの頃の俳壇が生気に溢れていたことを思い出します。

子規は正義をふりかざして、俳壇のみならず詩歌壇と闘いました。

その頃としては議論の内容が早過ぎたと言われてはいますが、次に来るべきものをちゃんと



アルス子規全集全 12 巻内容見本



同全 15 巻内容見本

掴んでいたところなど偉いと思います。現代に於いて和歌では万葉、俳句では蕪村に來り、漸次芭蕉に人々の研究が注がれていますが、子規は蕪村に行くべしと稱へた人でもあります。しかし、子規が若し現存しているものとしたら、蕪村の次の時代を芭蕉に求めたに相違ありません。

子規その人に就いては、生存中夏目先生に紹介され度々お眼にかかったこともあり、いろいろと書きたいことがあります、話せば話す程長くなりますので、此処ではただ偉い人であったということだけに留めて置きましょう。

これで見ると、改造社版で出す時に推敲・校正が入って少し違う表現になったようだ。

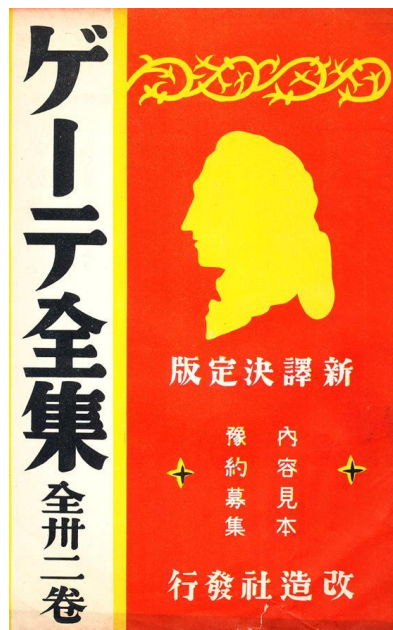
ここに出て来るアルスについて、日記や書簡を調べてみると、大正10年10月頃に散文集及び科学記事集発刊を持ちかけられていたことが出ていた。最終的に岩波茂雄と相談して、アルスには諦めてもらったようで、その後『冬彦集』と『藪柑子集』として岩波書店から出ている。

2. ゲーテ全集

全集第16巻での表題は『ゲーテ全集』である。「後記」をみると、「改造社版『ゲーテ全集』（全32巻、昭和10年10月より刊）の推薦文であるが、初出未見」とある。

改造社の内容見本予約募集をみてる。

全32巻の構成と組み見本が主であるが、吉村冬彦、横光利一など4名の推薦文もある。



改造社ゲーテ全集内容見本

綜合者ゲーテの再吟味
吉村冬彦
現代は人間の智恵の分化時代分裂時代である。哲學科學藝術等それぞれの分野に働く人々は、パベルの塔の工人達のやうにお互の言葉が通じなくなつてしまつてゐる。併し離れ／＼の智恵が一つに綜合される時代もいつかは來るであらう。さうした未來の建設に志す人々は、前世紀の綜合者ゲーテの全貌を、さうした見地から再吟味することに深い興味と意義を見出すであらう。私はこの意味でゲーテ全集の刊行を喜ぶものである。

吉村冬彦の推薦文

寅彦の推薦文（本文）は全集第16巻と同じであるが、題は「綜合者ゲーテの再吟味」、筆名は「吉村冬彦」となっている。改造社から頼まれた経緯はよくわからないが、ゲーテに関しては「読書の今昔」に、重兵衛さんの長男の楠さんから、「狐の裁判」（ゲーテ著）の翻訳書を借りた思い出が書かれているし、欧州留学時にゲーテハウスを訪ねたこともあった。この時は小宮豊隆にゲーテハウスの絵はがきを送っている。若い時からゲーテに親しみがあつたと思われる。